# 本間光丘になりきって

平成九年度　四年　女児

わたしたち四年生は、学習発表会で砂丘に松の木を植林した本間光丘のげきをすることになりました。主役の光丘の役は希ぼう者が多いので、オーディションで決めました。先生が、

「これから光丘の役のオーディションを始めます。大きな声で、せいいっぱいえんぎしてください。」とおっしゃいました。わたしは

「まちがえたらどうしょう。まわりのみんなの方が上手なんじゃないかな。」と不安になってきました。先生の声がしました。

「なんということだ。せっかく植えた松の木が。」わたしは練習したことを思い出して、心をこめてせりふを言いました。みんながわたしのことを注目していましたが、ぜんぜん気になりませんでした。無事にせりふを言い終わった後も、まだ心ぞうがどきどきしていました。

わたしに続いて何人もの人が同じせりふを言っていきました。どの人も上手でした。最後の人が言い終わって、いよいよ決定です。四人から二人えらばれます。

「さとみさんがよかったと思う人。」

たくさん手があがりました。わたしは、うれしい気持ちでいっぱいでした。

「やったあ！」と思わずさけんでしまいそうになりました。わたしをえらんでくれた友だち一人一人に「ありがとう」と言いたいくらいでした。

わたしは、家にとんで帰りました。わたしは、お母さんが帰ってくるのを今か今かと待ちました。その日にかぎってお母さんの帰りがとてもおそく感じられました。

お母さんが帰ってくると、わたしはすぐにオーディションのことを話しました。すると、お母さんはとてもびっくりしていました。そして、

「練習、ちゃんとやんなきゃだめだよ。お母さんが見てあげるからね。」と、やさしくわたしに言いました。わたしは、その言葉を聞いて

「よし、がんばるぞ。」と心に強く思いました。どんどん力がわいてくるようでした。

その日の夜からさっそく練習を始めました。まずせりふをおぼえなければなりません。わたしは、何度も何度も口に出しておぼえようとしました。でも、長いせりふもあっ

て、どうしてもおぼえられませんでした。
おぼえられないことがくやしくて、自分がなさけなくてたまらなくなりました。わたしは、思わず台本をたたみに投げつけました。でも、わたしの心の中はすっきりするどころか、ますます重くいやな気持ちでいっぱいになりました。
「さとみ、最初は台本を読んでもいいんだよ。あせるな。」とお兄ちゃんが、わたしに声をかけてくれました。でも、わたしにはそんなお兄ちゃんの声も耳に入りませんでした。
次の日からわたしは、ひまがあれば台本を開きました。そして、声を出して何度も台本を読みました。ごはんを食べている時も、おふろにはいっている時も、ふとんの中でも練習しました。一週間ぐらいたつと、ようやくすらすらせりふが言えるようになってきました。せりふが言えるようになると、自分なりに動作をつけて、えんぎをくふうしました。下を向いて悲しい気持ちを表げんしたり、うれしい気持ちを顔の表情で表したりしました。お母さんからも何度もせりふを聞いてもらいました。わたしに どんどん自信がわいてくるようでした。台本を投げた時のことがうそのようでした。その時のことを思い出すと、台本を投げた自分がとても小さく見えました。
学習発表会の日か来ました。光丘の衣しょうをつけると、いよいよきんちょうが高まってきました。まくの間から客席を見るとたくさんのお客さんが見えました。わたしは少し不安になりましたが、今まで一生けんめい練習にとりくんできたことを思い出すと、自然に力がわいてきました。わたしは、光丘になりきってせいいっぱいえんぎをしました。たくさんのはく手の中でまくがしまりました。大成功でした。
わたしは、光丘の役をやって本当によかったと心から思います。と中何度もくじけそうになったけれど、家族や友だちにはげまされて、せいいっぱい光丘の役をやりとげることができたからです。わたしにとって、わすれられないげきになりました。